●１０月選評

小島なお

・小島　涼我（東京都）

呼んでくれればすぐに行くから
知らない街の知らない川に花筏

いつでも、どこにいても、すぐに会いに行くという約束。たとえそこが知らない土地だったとしても。たとえ身体を失ったとしても。花筏に乗ってでも。

・植村　日向（愛知県）

ひび割れて
こぼれ落ちても向日葵で
ここはゾンビに見張られている

夏が過ぎ、どんな姿になり果てても向日葵は向日葵であることをやめることができない。無惨な向日葵が亡霊となって向日葵を生きながらえている。

・吉沢　美香（宮城県）

猫背なら動かせるかも秋の虹

猫背だからこそ果たすことのできる数少ない事柄のひとつとして。緩やかなカーブを描く背中と虹の曲線が柔らかい関わりを持ちはじめる秋。

・志内　悠真（京都府）

濃紺で犬、イヌ、いぬの帰り道
ちゃんぽんにして川また走って

濃紺の夜の散歩道を向こうからこちらから犬。大型犬や毛足の長い犬、服を着た

犬など。かわるがわる川沿いを走る愛すべき獣たち。

・字坊　人造（宮城県）

二択から煙草選んで星月夜

ひとつの選択肢を捨てて煙草を選ぶ夜。選択肢を捨て続けるこの日々。星はこれまでに捨てた無限か、あるいはこれから選ぶかもしれない無限か。

・森　榮太（東京都）

おれたちは水にはなれないで
ただ国とか市とかに関係がある

おれたちは水のようにしなやかに自分の姿を変えることはできない。国や市は、自分たちの不確かさを辛うじて確かなものに思わせる気休めの制度だろう。

・白藤　さくら（神奈川県）

燃えるスカート
ひるがえって　泳いで
いつかおさらの上

スカートはきっとあっという間に炎に焼き尽くされる。そこから逃れ逃れて、身ひとつでたどり着いた先はお皿の上。悪趣味な寓話のように。

・若人（千葉県）

週末は
右目と左目に　おなじ世界が映る

仕事から解放された週末にだけ、世界の像がたしかに結ばれ、認識と世界とに整

合性が生まれる。週が始まれば再び世界は解体され、自己も霧散する。

・純（東京都）

適当にあしらっている返事をされ
幽霊のいるジオラマつくる

適当にあしらわれた心が作らせるのは、現実の風景と心象風景が入り混じるジオラマ。そこにいるのは適当な扱いを受け続けた果ての幽霊だ。